

【佳作】

思い出の、三つ揃えスーツ

鈴木祐三郎・京都府

私が大学に入学した年のことなので、もう四〇年近くも前のことになる。入学祝いとしてスーツを眺えてくれると、父が私に言つた。父の洋服を仕立てて、隣町の仕立屋まで行つて、自分の好きな洋服を注文してきなさい、と言ふのである。

「人間は中身が大切だ、ということは言うまでもない。しかし、人間は外見で人間を判断しがちである。特に初対面のときは、洋服や靴で、相手を推し量る。だから、人に会う時はそれなりの格好をしていなければならぬ」

と、若い頃に事業を興して相当の苦労を重ねてきた父らしい、言い様であった。

その言葉に甘えて、隣町までスーツを作りに行つた。その時、仕立屋のご主人が、

「眺えるなら、三つ揃えにしてはどうか」

と、勧めてきた。ただ、私は、その頃も身長が一八五センチもあり、チョツキまで作るとなると、一人分の生地では足りないともいう。そこで、

「二人分の生地を使って、三つ揃えと替え用のズボンを作つてはどうか」

と、提案してきた。私は、父に相談することもなく、その場でそうすることに決めた。生地は良いものを選びなさい、という父の言葉もあつたので、ウールの高級品で作ることを頼んだ。代金は、仕立料も含めて一〇万円以上もしたと、覚えている。家に帰つてそのことを伝えたが、父は何も言わなかつた。

その父は、三年後、私が大学三年生の夏に急死した。

三つ揃えのスーツを眺えてから、長い時間が経過した。だが、今でもそのスーツを捨てずに持つてゐる。当時の私の体重は七〇キロぐらい、三〇歳過ぎた頃には八〇キロを超えた。その後、次第に痩せてきて、現在は六五キロまで落ちている。体重の変動に合わせて、ズボンのウエストを何度も加減してきたが、今では身に付けることもなくなつた。上着も、二本あるズボンも少々痛んでいる。

そのスーツは、もう処分しようかと考えたこともないではないが、「思い出」まで捨ててしまうように思われ、捨てる決心が付かずに今に至つてゐる。

昨今は、省エネの観点から、クールビズが求められている。半年前まで籍を置いていた会社でも、夏季の数ヶ月間はノーケータイでの勤務も許されていた。しかし、私は、どんなに厚い時でも夏用の上着を着て、ネクタイを締めていた。電車や勤務先の冷房が苦手だったためもあるが、

「人間は外見で人間を判断しがちである」

という、父の言葉が、頭の中に染み込んでいたためもある。

現在では、普段着と思われるような、ラフな衣服で仕事をする人も目につくが、私にはそれができなかつた。相手に不快な印象を与えるのではないか、と案ずるとともに、外見同様、中身までが乱雑になつてくるようと思われたからである。他人をそのような目で見てしまうこと以上に、自分がそのように見られることに、耐えられなかつたからもある。格好良くあり続けるためには、少々の我慢も必要だと思う。これは、衣服に限らず、生活のあらゆることに当てはまるのではないだろうか。

それにもしても、衣服もずいぶんと安価になつたものである。数万円もあれば、立派なスーツを買える。また、サイズもいろいろと揃つてるので、店に行けば、すぐにでもぴつたりと身にあつたものを手に入れることができる。私も、今までに何着も購入した。

しかし、そういう衣服に、「三つ揃えのスーツ」に抱いたような、特別の愛着を持つてなかつたことも事実である。着なくなつたのに、捨てずに持ち続けることもなかつた。残念ながら、使い捨ての、ただの消耗品として着てきたように、思われてならない。

私たちの身邊には、余りに多くの物があふれ、そして、簡単に新しい物と交換できるので、逆に物を粗末に扱つていいのではないか。物質的には豊かでも、心は貧しいような気がしてならない。

クローゼットの奥深いところに仕舞い込んだ、三つ揃えのスーツを時には取り出し、風を当ててみようかと思案している。そして、父のことじつくりと思い出してみようと、父の没した年齢に近づいた私は、この頃思い続けている。